



## わたしの研究 ④

テーマ

# 野宿と川漁師と 環境問題

藤本 延啓



みなさんこんにちは。社会福祉学部の藤本と申します。専門分野は社会学で、フィールドワークを重ねながら、地域社会での人々の暮らしや思いを通して「環境」にアプローチしていくのが私の研究スタンスです。

このような研究スタンスにたどり着いたことについて、私の経験をさかのぼっていくとあるひとつの出来事につながります。

### 1. 野宿チャリ旅

学部学生の頃、私は自転車に乗って旅をするのが好きでした。テントや寝袋、自炊のためのガソリンコンロを自転車に積んで、野宿しながらの旅です。

移動手段が自転車である理由は、お金がかからないことが最大の理由ではありましたが、このような旅を何度も繰り返しているうちに、旅の記憶が非常に濃厚であることに気づき始めました。景色はもとより、風・におい・日差し・道のしんどさ等々、多面的で豊富な情報が頭と体に刻みつけられるのです。

一方、野宿適地を的確かつ素早く選べるようになることには経験の積み重ねと卓越した観察眼が要求されますが、野宿という手段が自在に使えるようになると、「宿を決める」「その日のうちに宿に着かないといけない」

という行動上の制約から解放されます。時間と体力さえあれば、自転車を移動手段とする野宿の旅が最高に魅力的であるという思いは今でも変わりません（ただ、その「時間と体力さえあれば」というのが問題なだけです）。

### 2. 初めての「フィールドワーク」

地図を眺めてはひたすら走り回るだけだった旅に、初めて自ら「目的」を設定したのは、四国の四万十川へ行った時のことです。

きっかけは『四万十川・歩いて下る』（多田実1995,築地書館）という本を読んだことでした。タイトルの通り、著者が四万十川の源流から河口まで徒歩で旅をしていく形を取りながら、途中に出会う地元の人々との会話や目にする景色を通して、林業や河川行政の現状を明らかにしていくといった内容です。今読むとセンセーショナルな印象を狙った記述がやや鼻につく本なのですが、少なくとも当時の私にひとつのきっかけを与えてくれた本だったことは確かです。

私は、その夏の旅を、四万十川の河口から源流まで河原で野宿しながら自転車で走ることと決め、「山や川の土木工事の様子に気をつける」「地元の人たちと積極的に話をする」ことを自分に課すことにしました。（今思えば、これが私にとって最初の“フィールドワーク”だったということになりそうです。当時の私は“フィールドワーク”という言葉すら知りませんでした）。

### 3. ある川漁師との出会い

四万十川の河口を出発して3日目か4日目の朝だったと思います。中流域のある河原で野宿をした私が川の水で顔を洗っていると、ひとりの初老の男性が近づいてきて「どこから来た？」と声をかけてきました（自転車で野宿の旅をしていると、こうやって地元の人から声をかけられることがよくあります。場

合によっては食べ物をいただけることも)。

その男性は川でエビを捕ることを生業にしている川漁師でした。

四万十川では、ヤマトテナガエビという川エビが河原の石の下に住んでいます。エビは基本的にバックしかできませんから、石を右手でそろりと浮かせてそこにエビがいることを確認したら、エビの後ろに左手を広げておいて石をパッと持ち上げます。すると手の中にエビがスポッと入ってくるという寸法です。その川漁師はそうやってエビを捕まえることでずっと生計を立ててきていたのでした。

ところが、その川漁師が言うには「近ごろ川エビが減ってきた。昔は石をひっくりかえせば必ずエビがいたもんだが、最近は3つ4つひっくり返して、やっとひとついるくらいだ」そして「やたら土木工事をやるから川が汚れる」「愛媛の方から流れてくる支流は特に汚れている。愛媛は高知より金があって工事をたくさんやるからだ」「もうエビだけでは食えない」と嘆いていました(もちろん、愛媛からの支流が特に汚れているというのはその川漁師の主観によるもので、客観的にどうだったかはわかりません)。

そこで私が「じゃあどうやって食ってるんですか?」と聞くと、「土木工事だ」と言い、「愛媛の奴らは川を汚すからなあ」と言いながら、吸っていたタバコの吸い殻を川へ放り投げたのです。

#### 4. 当てはめられる「環境問題」への違和感

環境問題と社会学に傾倒し始めていた当時20代前半だった私が、この出来事を通して思い知ったのは「現実」の姿でした。

この川漁師の言動は一見むちゃくちゃです。自分の本業のためには川が清浄でなければいけないのに、自ら「川を汚す」と断言している土木工事に手を染め、その上タバコを川へ投げ捨てています。

川エビ漁で食えないのなら、川漁師をやめて土木工事を本業にすりゃいいじゃないかというのが単純な印象でしょう。しかし「川漁師であること」は、いわばこの男性にとってのアイデンティティであり、漁師をやめてしまうことが非常に難しいことは、彼との話の中からひしひしと伝わってきました。つまり、彼が彼でありつづけるためには、たとえ自分で自分の首を絞める結果になっても、土木工事を副業にして現金収入を得ながら川エビ漁を続けていくことが(彼が生きる地域社会の枠組みの中では)実は最も合理的な選択なのかもしれないのです。

「人は生きていかななくてはならない」という大前提。その「生きていく」場である地域社会に対して外部から「環境問題」という概念を一方向的に当てはめること。そこに感じる何とはなしの違和感…この経験から私が感じ取ったことは、そんなようなことだったと思います。

#### 5. 旅と研究

その後私は大学院に進学し、社会学を学び、フィールドワークを繰り返すようになりました。大規模な産廃不法投棄事件の舞台になった香川県の豊島や、ごみの34分別・葉っぱを売る「いろどり農業」で有名な徳島県の上勝町に住み込んで学ぶ中で、地域社会での人々の暮らしから「環境」にアプローチしていくという現在の私の研究スタンスが生まれてきました。

旅を「研究」へ変えていったのか、「研究」を旅へと近づけていったのか。今回この原稿を書かせていただく中で、今の自分も似たようなことを職業としてやってるなあと少し可笑しい気分になったことと同時に、あのかの川漁師のじいさんが、今でも私の目の奥でエビを捕っていることにあらためて気づいた次第です。(本研究員 環境社会学)